

曙覧の歌

正岡子規

青空文庫

余の初め歌を論ずる、ある人余に勧めて俊頼集、文雄集、曙覧集を見よという。それかくいうは三家の集が尋常歌集に異なるところあるをもつてなり。まず源俊頼の『散木さんぼく 棄歌集きかしゆう』を見て失望す。いくらかの珍しき語を用いたるほかに何の珍しきこともあらぬなり。次に井上文雄の『調鶴集ちようかく』を見てまた失望す。これも物語などにありて普通の歌に用いざる語を用いたるほかに何の珍しきこともあらぬなり。最後に橘曙覧の『志濃夫しのぶ 廼舎歌集のや』を見て始めてその尋常の歌集に非ざるを知る。その歌、『古今』『新古今』の陳套ちんとうに堕おちらず真淵まぶち、景樹かげきの窠かきゆう白はくに陥おちらず、『万葉』を学んで『万葉』を脱し、鎖事俗さじ事ことを捕とえ来きたりて縦横じゆうけいに馳ち駆くするところ、かえつて高雅こうあ蒼そう老ろう些せの俗気じやくきを帯おびず。ことにその題目が風月の虚飾きよしを貴たばずして、ただちに自己こゝろの胸臆きようおくを攄しくもの、もつて識見ちきん高こう邁まい、凡俗ぼんじやくに超越ちゆうえつするところあるを見るに足る。しこうして世人よじんは俊頼と文雄を知りて、曙覧の名だにこれを知らざるなり。

曙覧の事蹟及び性行せいぎやうに關しては未いまだこれを聞くを得ず。歌集にあるところをもつてこれを推すに、福井辺の人、広く古学を修め、つとに勤王の志を抱く。松平春岳まつだいらしゆんがく挙あげて和歌の師とす、推獎もつとも最もつとむ。しかれども赤貧洗あかひんせんうがごとく常に陋屋ろうおくの中に住んで世と

容れず。古書堆裏独破几に凭りて古を稽え道を楽む。詠歌のごときはもとよりその専攻せしところに非ざるべきも、胸中の不平は他に漏らすの方なく、凝りて三十一字となりて現れしものなるべく、その歌が塵氣を脱して世に媚びざるはこれがためなり。彼自ら詠じて曰く

吾歌をよろこび涙こぼすらむ鬼のなく声する夜の窓

灯火のもとに夜な夜な来たれ鬼我ひめ歌の限りきかせむ

人臭き人に聞する歌ならず鬼の夜ふけて来ばつげもせむ

凡人の耳にはいらじ天地のこころを妙に洩らすわがうた

何らの不平ぞ。何らの気焰ぞ。彼はこの歌に題して「戯れに」といいしといえども「戯れ」の戯れに非るはこれを読む者誰かこれを知らざらん。しかるをなお強いて「戯れに」と題せざるべからざるもの、その裏面には実に万斛の涕涙を湛うるを見るなり。吁この不遇の人、不遇の歌。

彼と春岳との関係と彼が生活の大体とは『春岳自記』の文に詳なり。その文に曰く

橘曙覧の家にとる詞

おのれにまさりて物しれる人は高き賤きを選ばず常に逢見て事尋ねとひ、あるは物語

を聞きかまほしくおもふを、けふは此この頃にはめづらしく日影ひかげあたたかに久ひさ堅かたの空晴渡り
 てのどかなれば、山川野辺のけしきこよなかるべしと巳みの鼓つづみうつ頃より野遊のあそびに出た
 りき、三橋といふ所にいたる、中根師質なかねもろただあれこそ曙覽あけぼのの家なれといへるを聞きて、俄にわか
 にとはむとおもひなりぬ、ちひさき板屋の浅ましげにてかこひもしめたらぬに、そこ
 かしこはらひもせぬにや塵ちりひぢ山をなせり、柴の門もなくおぼつかなくも家にいりぬ、
 師質心せきたるさまして参議君の御成おなりぞと大声にいへるに驚きて、うちよりししじも
 の膝折ひざひふせながらはひいでぬ、●
 すこし広き所に入りてみれば壁落おちかかり障子はやぶれ畳はきれ雨もるばかりなれども、
 机こたえに千文ちふみや八百やおふみうづたかくのせて人丸ひとまるの御像みぞうなどもあやしき厨子くしに入りてあり、
 おのれきものぬぎかへて賤しずが著きるつづりおりに似たる衣いをきかへたり、此時扇この一握いちあく
 を半井保なからいたもつにたまひて曙覽あけぼのにたびてよと仰せたり、おのれいへらく、みましの屋の
 名をわらやといへるはふさはしからず、橘のえにしあれば忍ぶの屋とけふよりあらた
 めよといへり、屋いのきたなきことたとへむにものなし、しらみてふ虫などもはひぬべ
 小。お。も。ふ。ば。か。り。な。り。●
 かたちはかく貧ますしくみゆれど其心そののみやびこそいといとしたはしけれ、おのれは富貴の

その貧乏さ加減、我らにも覚えのあることなり。

ひた土に筵むしろしきて、つねに机つくえすゑおくちひさき伏屋ふせやのうちに、竹生おいでて
長うのびたりけるをそのままにしおきて

壁くぐる竹に肩する窓のうちみじろくたびにかれもえだ振る

膝ひざいるるばかりもあらぬ草屋を竹にとられて身をすぼめをり

明治に生れたる我らはかくまで貧しくなられ得べくもあらず。（「草屋」を「草の屋」と読ませ「草花」を「草の花」と読ます例、集中に少からず。漢語にはあらず）

錢かね乏ひんしかりける時

米の泉いずみなほたらずけり歌をよみ文をつくりて売りありけども

彼かれが米代こめしろを儲もつけ出す方法はこの歌によりてやや推すべし。（「泉」は「ぜに」と読むべし）

ある日、多田氏の平生窟くわより人おこせ、おのが庵いおの壁かべの顔かほれかかれるをつ
くろはす来つる男のこまめやかなる者にて、このわたりはさておけよかめ
りとおのがいふところどころをもゆるしなう、机つくえもなにもうばひとりてこ
なたかなたへうつしやる、おのれは盗人いりの入いりたらん夜のここちしてうろた

へつつ、かたへなるところに身をちひさくなしてこのをの子のありさま見
をる、我ながらをかしさねんじあへて

あるじをもここにかしこに追たてて壁ぬるをのこ屋中塗りめぐる

家の狭さと、あるじの無頓着むとんちやくさはこの言葉書ことばがきの中にあらわれて、その人その光景

目前に見るがごとし。

おのがすみかあまたたび所うつりかへけれど、いづこもいづこも家に井な
きところのみ、妻して水汲くみはこぼする事もかきかぞふれば二十年あまり
の年をぞへにきける、あはれ今はめもやうやう老おいにたれば、いつまでかか
くてあらずべきとて、貧き中にもおもひわづらはるあまり、からうじて
井ほらせけるにいとときよき水あふれ出いづ、さくもてくみとらるべきばかり
おほうあるぞいとうれしき、いつばかりなりけむ□「しほならであさなゆ
ふなに汲む水もからき世なりとぬらす袖そでかな」と、そぞろごとひけるこ
とのありしか、今はこのぬれける袖もたちまちかわきぬべう思はるれば、
この新しき井の号を袖干井そでひのいとつけて

濡ぬらしこし妹が袖干そでひの井の水の涌わきい出るばかりうれしかりける

家に婢僕なく、最合井遠くして、雪の朝、雨の夕の小言は我らも聞き馴れたり。
 「独楽唼」と題せる歌五十余首あり。歌としては秀逸ならねど彼の性質、生活、嗜好などを
 知るには最便ある歌なり。その中に

たのしみはあき米櫃に米いでき今一月はよしといふ時

たのしみはまれに魚煮て児等皆がうましうましといひて食ふ時

など貧苦の様を詠みたるもあり。

文人の貧に処るは普通のことにして、彼らがいくばくか誇張的にその貧を文字に綴るも
 また普通のことなり。しこうしてその文字の中には胸裏に蟠る不平の反応として厭世的
 または嘲俗的の語句を見るもまた普通のことなり。これ貧に安んずる者に非ずして貧
 に悶ゆる者。曙覽はたして貧に悶ゆる者か否か。再びこれをその歌詠に徴せん。

〔『日本』明治三十二年三月二十三日〕

余は思う、曙覽の貧は一般文人の貧よりも更に貧にして、貧曙覽が安心の度は一般貧文
 人の安心よりも更に堅固なりと。けだし彼に不平なきに非るもその不平は国体の上におけ
 る大不平にして衣食住に關する小不平に非ず。自己を保護せずしてかえつて自己を棄てた

る俗世俗人に対してすら、彼は時に一、二の罵詈を加うることなきにしもあらねど、多くはこれを一笑に付し去りて必ずしも争わざるがごとし。「独楽噺」の中に

たのしみは木芽^{このめ}淪^{にや}して大きなる 饅頭^{まんじゅう}を一つほほばりしとき

たのしみはつねに好める焼豆腐^{まく}うまく煮^にたてて食^くせけるととき

たのしみは小豆^{あずき}の飯^{ひえ}の冷^{ひえ}たるを茶漬^{つけ}てふ物になしてくふ時

多言^{もち}するを須^{もち}いず、これらの歌が曙覧ならざる人の口より出^いで得^いべきか否^いかを考えみよ。陽^{たのし}に清貧^{たのし}を樂^しんで陰^しに不平^しを蓄^しうるかの似^え而非^せ文人^しが「独楽噺」という題目の下にはたして饅頭^し、焼豆腐^しの味^しを思^しい出^しだすべきか。彼らは酒^しの池^し、肉^しの林^しと歌^しわずんば必ず^しや麦^しの飯^し、藜^{あかぎ}の羹^{あつもの}と歌^しわん。饅頭^し、焼豆腐^しを取^しつてわざわぎこれを三十一文字^しに綴^{つづ}る者^し、曙覧^しの安心^しありて始めてこれあるべし。あら面白^しの饅頭^し、焼豆腐^しや。

安心^しの人に誇張^しあるべからず、平和^しの詩^しに虚飾^しあるべからず。余^しは更^しに進^しんで曙覧^しに一点^しの誇張^し、虚飾^しなきことを証^しせん。似^え而非^せ文人^しは曰^しく、黄金^{ひやくまんびん}一^し百萬^し緡^しは門前^しのくろ（犬^し）の糞^しのごとしと。曙覧^しは曰^しく

たのしみは錢^しなくなりてわび^しをるに人^{きた}の来^{きた}りて錢^しくれし時^し

たのしみは物^しをかかせて善^よき価値^{おし}みげもなく人^しのくれし時^し

曙覽は欺かざるなり。彼は錢を糞の如しとは言わず、あどけなくも彼は錢を貰いし時のうれしさを歌い出だせり。なお正直にも彼は錢を多く貰いし時の思いがけなきうれしをも白状せり。仙人のごとき仏のごとき子供のごとき神のごとき曙覽は余は理想界においてこれを見る、現実界の人間としてほとんど承認するあたわず。彼の心や無垢清淨、彼の歌や玲瓏透徹。

貧、かくのごとし、高、かくのごとし。一たびこれに接して畏敬の念を生じたる春岳はこれを聘せんとして侍臣をして命を伝えしめしも曙覽は辞して応ぜざりき。文を売りにて米の乏しきを歎き、意外の報酬を得て思わず打ち笑みたる彼は、ここに至つて名利を見ること門前のくろの糞のごとくなりき。臨むに諸侯の威をもつてし招くに春岳の才をもつてし、しこうして一曙覽をして破屋竹筍の間より起したしむるあたわざりしもの何がゆえぞ。謙遜か、傲慢か、はた彼の国体論は妄に仕うるを欲せざりしか。いづれにもせよ彼は依然として饅頭焼豆腐の境涯を離れざりしなり。慶応三年の夏、始めて秩禄を受くるの人となりしもわずかに二年を経て明治二年の秋(?)彼は神の国に登りぬ。曙覽が古典を究め学問に耽りしことは別に説くを要せず。貧苦の中にありて「机に千文八百文堆く載せ」たりという一事はこれを証して余りあるべし。その敬神尊王の主義を現した

る歌の中に

高山彦九郎正之

大御門おおみかどそのかたむきて橋上うなねつきに頂根突まごころけむ真心まごころたふと

をりにふれてよみつづける(録一)

吹風ふくかぜの目にこそ見えぬ神々は此天地このあめつちにかむづまります

独楽えみし咄(録二)

たのしみは戎夷えみしよろこぶ世の中に皇国みくに忘れぬ人を見るとき

たのしみは鈴屋大人すずのやうしの後に生れその御諭みさとしをうくる思ふ時

赤心せきしん報もてくにむくゆ国(録一)

国汚やっこす奴やつこあらばと太刀拔ぬきて仇あだにもあらぬ壁かべに物いふ

示人ひとにしめす(録一)

天皇すめらぎは神にしますぞ天皇ちよくの勅ちよくとしいはばかしこみまつれ

極めて安心あんしんに極めて平和へいなる曙覧しやうらんも一たび国体こくたいの上に想おもい到いたる時は満腔まんこうの熱血ねつけつを灑そそぎて敬神けいじんの歌うたを作り不平へいの吟ぎんをなす。慷慨こうがい淋漓りんり、筆ふで、劍けんのごとし。また平日へいじつの貧曙覧みずしやうらんに非ひず。彼かれがわずかに王政維新おうせいゐしんの盛典せきだんに逢あうを得えたるはいかばかりうれしかりけむ。

慶応四年春、浪華に

行幸あるに吾^{わが}

宰^{さい}相^{しやう}君^{きみ} 御供仕^{おんどもし}たまへる御とも仕まつりに、上月^{こうづき}景光^{かげみつ}主^{ぬし}のめさ

れてはるばるのぼりけるうまのはなむけに

天皇の御^みさきつかへてたづがねののどかにすらん難波津^{ゆけ}に行

すめらぎの稀^{まれ}の行^{いでまし}幸^{みとも}御供する君のさきはひ我もよろこぶ

天使のはろばろ下りたまへりける、あやしきはぶるひ人^{びと}どもあつまりる

る中にうちまじりつつ御けしきをがみ見まつる

隠士も市の大路に匍^{はらばい}匍^{はらばい}ならびをろがみ奉^{まつ}る雲の上人

天皇の大御使^{おおみつかい}と聞くからにはるかにをがむ膝をり伏せて

勅使をさえかしこがりて匍匐^{はらば}いおろがむ彼をして、一たび二重橋下に鳳輦^{ほうれん}を拝するを

得せしめざりしは返すがえすも遺憾^{いかん}のことなり。

都にのぼりて

大行^{たいこう}天皇の御はふりの御わぎはてにけるまたの日、泉涌寺^{せんにゆうじ}に詣^{もう}たりけ

るに、きのふの御わぎのなごりなべて仏さまに物したまへる御ありさまに

うち見奉られけるを畏かしこれどうれはしく思ひまつりて

ゆゆしくも仏の道にひき入るる大御車おのみくるまのうしや世の中

曙覽は王政維新の名を聞きて、その実を見るに及ばざりしなり。

〔『日本』明治三十二年三月二十四日〕

社会の一貧民としての曙覽、日本国民の一人としての曙覽は、臆測ながらにほぼこれを尽せり。ここより歌人としての曙覽につきて少しく評するところあらんとす。

曙覽の歌は比較的に何集の歌に最も似たりやと問わば、我れも人も一齊に『万葉』に似たりと答えん。彼が『古今』、『新古今』を学ばずして『万葉』を学びたる卓見はわが第一に賞揚せんとするところなり。彼が『万葉』を学んで比較的善よくこれを模し得たる伎ぎりよ倆うはわが第二に賞揚せんとするところなり。そもそも歌の腐敗は『古今集』に始まり足利時代に至つてその極点に達したるを、真淵まぶちら一派古学を闢ひらき『万葉』を解きようやくい縷ちるの生命を繋つなぎ得たり。されど真淵一派は『万葉』を解きて『万葉』を解かず、口には『万葉』をたたえながらおのが歌は『古今』以下の俗調を学ぶがごときトンチンカンを演出わらいして笑を後世に貽のこしたるのみ。『万葉』が遥はるかに他集に抽ぬきんでたるは論を待たず。その抽

んでたる所以は、他集の歌が豪も作者の感情を現し得ざるに反し、『万葉』の歌は善くこれを現したるにあり。他集が感情を現し得ざるは感情をありのままに写さざるがためにして、『万葉』がこれを現し得たるはこれをありのままに写したるがためなり。曙覧の歌に曰く

いつはりのたくみをいふな誠だにさぐれば歌はやすからむもの

「いつはりのたくみ」『古今集』以下皆これなり。「誠」の一字は曙覧の本領にして、やがて『万葉』の本領なり。『万葉』の本領にして、やがて和歌の本領なり。我謂うところの「ありのままに写す」とはすなわち「誠」にほかならず。後世の歌人といえども、誠を詠め、ありのままを写せ、と空論はすれどその作るところのかえっていつわりのたくみを脱するあたわざるは誠、ありのまま、の意義を誤解せるによる。西行のごときは幾多の新材料を容れたるところあるいはこの意義を解する者に似たれど、実際その歌を見れば百中の九十九は皆いつわりのたくみなるを知らん。趣味を自然に求め、手段を写実に取りし歌、前に『万葉』あり、後に曙覧あるのみ。

されば曙覧が歌の材料として取り来るものは多く自己周囲の活人事活風光にして、題を設けて詠みし腐れ花、腐れ月に非ず。こは『志濃夫廼舎歌集』を見る者のまず感ずる

ところなるべし。彼は自己の貧苦を詠めり、彼は自己の主義を詠めり。亡き親を想いては、「親ある人もあるに」と詠み、亡き子を想いては、「きのふ袂たもとにすがりし子の」と詠めり。行幸の供にまかる人を送りては、「聞くだに嬉うれし」と詠み、雪の頃旅立つ人を送りては、「用心してなだれに逢あふな」と詠めり。樂たのみては「樂し」と詠み、腹立てては「腹立たし」と詠み、鳥啼なけば「鳥啼く」と詠み、蠡いなご飛べば「蠡飛ぶ」と詠む。これ尋常のことのごとくなれど曙覽以外の歌人には全くなきことなり。面白からぬに「面白し」と詠み、香もなきに「香におに匂ふ」と詠み、恋しくもなきに「恋にあこがれ」と詠み、●

見もせぬに遠き名所を詠み、しこうして自然の美のおのが鼻なの尖さきにぶらさがりたるをも知らぬ貫つらゆき之以下の歌よみが、何百年の間、数限りもなくはびこりたる中に、突然として曙覽の出でたるはむしろ不思議の感なきに非ず。彼は何に縁よりてここに悟るところありしか。彼が見しこと聞きしこと時に触れ物に触れて、残さず余さずこれを歌にしたるは、杜と甫ほが自己の経歴を詳つまびらかに詩に作りたると相似あいたり。古人が杜詩を詩史と称えし例ならに倣ならわば曙覽の歌を歌史ともいうべきか。余が歌集によりてその人の事蹟じせきと性行とを知り得たるもその歌史たるがためなり。しかれども彼が杜詩より得たるか否かは知るに由よしなし。ただ杜甫の経歴の変化多く波瀾はらん多きに反して、曙覽の事蹟ははなはだ平和にはなはだ狭きよう隘あいに、

時は逢いがたき維新の前後にありながら、幾多の人事的好題目をその詩囊しのう中に収め得ざりしこと実に千古の遺憾いかんなりとす。
 「『日本』明治三十二年三月二十六日」

『古今集』以後今日に至るまでの撰集、家集を見るに、いずれも四季の歌は集中の最要部分を占めて、少くも三分の一、多きは四分の三を占むるものさえあり。これに反して四季の歌少く、雑ぞうの歌いちじるしの著く多きを『万葉集』及び『曙覧集』とす。この二集の他に秀でたる所以ゆえんなり。けだし四季の歌は多く題詠にして雑の歌は多く實際より出いづ。『古今集』以後の歌集に四季の歌多きは題詠の行われたるがためにして世下るに従い恋の歌も全く題詠となり、雑の歌も十分の九は題詠となりおわりぬ。曙覧の歌すら四季のには題詠とおぼしきがあり、かつ善からぬが多し。題詠必ずしも悪あしとに非ず、写実必ずしも善しとに非ず。されど今日までの歌界の實際を見るに題詠に善き歌少くして写実に俗なる歌少し。曙覧が實地に写したる歌の中に飛驒ひだの鉾山を詠めるがごときはことに珍しきものなり。

日の光いたらぬ山の洞ほらのうちに火ともし入いりてかね掘ほり出す
 赤まはだか裸おのこの男子おのこむれるて鉾あらがねのまろがり砕つぶく鎚つちうち揮ふりて
 さひづるや確からうすたててきらきらとひかる塊まろがりつきて粉こにする

笕かけひかけとる谷水にうち浸しゆれば白露手にこぼれくる

黒むらけぶり群りたたせ手もすまに吹ふき鑠とろかせばなだれ落おるかね

鑠とろくれば灰とわかれてきはやかにかたまり残る白銀の玉

銀しろがねの玉をあまたに筥はこに収いれ荷に緒おかためて馬ば馳はしらす

しろがねの荷お負える馬ばを牽ひかたてて御み貢つきつかふる御世のみさかえ

採鋤溶鋤より運搬に至るまでの光景仔細しさいに写し出して目観みるがごとし。ただに題目の新
奇なるのみならず、その叙述の巧たくみなる、実に『万葉』以後の手際なり。かの魚彦なひこがいたず
らに『万葉』の語句を模して『万葉』の精神を失えるに比すれば、曙覧が語句を摸もせずし
てかえつて『万葉』の精神を伝えたる伎倆は同日に語るべきにあらず。さわれ曙覧は徹頭
徹尾『万葉』を擬せんと務めたるに非ず。むしろその思うままを詠みたるが自おのずから『万葉』
に近づきたるなり。しこうして彼の歌の『万葉』に似ざるところははたして『万葉』に優
るところなりや否や、こは最大もつとも切なる問題なり。

余は断定を下していわん、曙覧の歌想は『万葉』より進みたるところあり、曙覧の歌調
は『万葉』に及ばざるところありと。まず歌想につきて論ぜん。

〔『日本』明治三十二年三月二十八日〕

歌想到主観的なるものと客観的なるものとあり。『万葉』は主として主観的歌想を述べたるものにして客観的歌想は極めて少かりしが、『古今』以後、客観的歌想の歌、次第にその数を増加するの傾向を見る。

主観的歌想の中にて理屈めきたるはその品卑しく趣味薄くして取るに足らず。『古今』以後の歌には理屈めきたるが多けれど『万葉集』、『曙覧集』にはなし。理屈ならぬ主観的歌想は多く実地より出でたるものにして、古人も今人もさまで感情の変るべきにあらぬに、まして短歌のごとく短くして、複雑なる主観的歌想を現すあたわず、ただ簡單なる想をのみ主とするものは、觀察の精細ならざりし古代も觀察の精細に赴きし後世も差異はなはだ少きがごとし。ただ時代時代の風俗政治等々しからざるがために材料または題目の上には多少の差異なきにあらず。例えば万葉時代には実地より出でたる恋歌の著しく多きに引きかえ『曙覧集』には恋歌は全くなくして、親を懐おもい子を悼なげみ時を歎なげくの歌などがかえつて多きがごとし。

曙覧の歌、四よつになる女の子を失いて

きのふまで吾衣わがころも手にとりすがり父よ父よといひてしものを

父の十七年忌に

今も世にいまされざらむよはひにもあらざるものをあはれ親なし
 髪しろくなりても親のある人もおほかるものをわれは親なし

母の三十七年忌に

はふ児にてわかれまつりし身のうきは面だおもに母を知らぬなりけり

古書を読みて

真男鹿まおしかの肩焼く占うらにうらとひて事あきらめし神代をぞ思ふ

筑紫人つくしびとのその国へかえるに

程すぎて帰らぬ君と夕占ゆづけとひまつらむ妹にとく行ゆきて逢へ

されど女を思うも子を思うも恋い思うとばかり詠む短歌にては、感情の切なるを感ずる
 ほかなければ、いずれにても深き差異あるにあらず。この点において『万葉』と曙覧と強
 いて優劣するを要せず。しこうして客観的歌想に至りては曙覧やや進めり。

四季の題は多く客観的にして、『古今』以後客観的の歌は増加したれど、皆縁語または
 言語の虚飾を交えて、趣味を深くすることを解せざりしかば、絵画のごとく純客観的なる
 は極めて少かり。『新古今』は客観的叙述いちじるしにおいて著く進歩しこの集の特色を成ししも、
 以後再び退歩して徳川時代に及ぶ。徳川時代にては俳句まず客観的叙述において空前の進

歩をなし、和歌もまたようやく同じ傾向を現ぜり。されども歌人皆頑陋編狭にし、古習を破るあたわず、古人の用い来りし普通の材料題目の中にてやや変化を試みしのみ。曙覽、徳川時代の最後に出でて、始めて潤眼を開き、なるべく多くの新材料、新題目を取りて歌に入れたる達見は、趣味を千年の昔に求めてこれを目睫に失したる真淵、景樹を驚かすべく、進取の気ありて進み得ず超超逡巡として姑息に陥りたる諸平、文雄を圧するに足る。徳川時代の歌人がわずかに客観的趣味を解しながら深くその蘊奥に入るあたわざりしは、第一に「新言語新材料を入れるべからず」という従来の規定を脱却するあたわざりしに因る。曙覽はまずこの第一の門戸を破りて、歌界改革の一步を進めたり。

〔『日本』明治三十二年三月三十日〕

曙覽が客観的景象を詠ずるは、新材料を入れたることにおいて、新趣味を捉えしことにおいて、『万葉』より一步を進めたとともに、新言語新句法を用いしことにおいて、一般歌人よりは自在に言いこなすことを得たり。

あきのでんか
秋田家

いなごまろ

※うるさく出でとぶ秋のひよりよろこび人豆を打つ

とり 酉（詠 十二時の内）

夕貌ゆうがおの花しらじらと咲めぐる賤しずが伏屋ふせやに馬洗うまひをり

まつのと 松戸にて口よりいづるままに（録二）

ふくろふの糊のりすりおけと呼ぶ声こゑに衣きぬときはなち妹は夜ふかす

こぼれ糸いとにつくりて魚とると二郎太郎三郎川に日くらす

こころのあめ 行路雨

雨ふれば泥踏ふみなづむ大津道我おおつみちに馬ありめさね旅人

こじのあめ 古寺雨

風まじり雨ふる寺の犬ふせぎしぶきのぬれにうつるみあかし

寒灯

ともすれば沈灯しずむともしび火かきかきて芋おをうむ窓あられに霰あられうつ声

さげつすずし 砂月涼

そとの浜ち千さとの目路めじに塵ちりをなみすずしき広き砂すなのうえ 上うへの月

そうび 薔薇

羽ならず蜂あたたかに見なさるる窓をうづめて咲くさうびかな

題しらず

雲ならで通はぬ峰の石陰いわかげに神世のほひ吐く草くさのはな花

歌会の様よめる中に（録五）

人麻呂の御像みかたのまへに机ともしびすゑ灯ともしびかけ御酒みきそなへおく

設け題よみてもてくる歌どもを神の御前みまへにならべもてゆく

ことごとく歌よみいでし顔を見てやをゆうげら晩食おしきの折敷おしきならぶる

汁食めせとすすめめぐりてとぼしたる火もきえぬべく人突つぎあたる

戸をあけて還る人々雪しろくたまれりといひてわびわびぞ行ゆく

初はつ午ま詣もうで

稻荷坂見あぐる朱あけの大鳥居うごかゆり動して人のぼり来る

「設け題」「探り題」「あき米櫃」「饅頭を頬ばる」「笑ひかたりて腹をよる」「置かず

狸のものの広さにて」「二郎太郎三郎」など思うに任せて新語新句をはばかり気もなく使

いたるのみならず、「人豆を打つ」「涼しさ広き」「窓をうづめてさく薔薇」などいうが

ごとく、詩または俳句には用うれど、歌にはいまだ用いざる新句法をも用いたるはその見

識の凡^{ほん}ならぬを見るべし。「神代のにほひ吐く草の花」といえる歌は彼の神明的理想を現したるものにて、この種の思想が日本の歌人に乏しかりしは論を俟^またず。（曙覽の理想も常にこの極處に触れしにあらざ）一般に天然に対する歌人の觀察は極めて皮相的にして花は「におう」と詠み、月は「清し」と詠み、鳥は「啼^なく」、とのみ詠むのほか、花のうつくしき、月の清さ、鳥の啼く声をしみじみと身にしめて感じたる後に詠むということなれば、変化のなきのみか、その景象を明^{めい}瞭^{りょう}に眼前に浮^うばしむることは絶えてあるなし。曙覽の叙景法を見るにしからず。例えば「赤きもみぢに霜ふりて」「霜の上に冬木の影をうす黒くうつして」と詠めるがごとき、「もみぢ」の上に「赤き」という形容語を冠^{かぶ}せ、「影」の下に「うす黒き」という形容語を添えて、ことさらに重複せしめたるは、霜の白さを強く現さんとの工夫なり。その成功はともかくも、その著^{ちやく}眼^{がん}の高きことは争うべからず。

曙覽は擬古の歌も詠み、新^{しん}様^{よう}の歌も詠み、慷^{かう}慨^{がい}激烈の歌も詠み、和^わ暢^{ちやう}平^{へい}遠^{えん}の歌も詠み、家屋の内をも歌に詠み、広野の外をも歌に詠み、高^{たか}山^{やま}彦^{ひこ}九^く郎^{ろう}をも詠み、御^お魚^{さかな}屋^や八^や兵^{へい}衛^えをも詠み、俠^{きやう}家^かの雪も詠み、妓^ぎ院^{いん}の雪も詠み、蟻^{あり}も詠み、虱^{しらみ}も詠み、書中の胡^こ蝶^{ちょう}も詠み、窓外の鬼神も詠み、饅^{まん}頭^{とう}も詠み、杓^{しゃく}子^しも詠む。見るところ聞くとこころ触る

るところことごとく三十一字中に収めざるなし。曙覧の歌想豊富なるは単調なる『万葉』の及ぶところにあらず。
 〔『日本』明治三十二年四月九日〕

世に『万葉』を模せんとする者あり、『万葉』に用いし語の外は新らしき語を用いず、『万葉』にありふれたる趣のほかは新しき趣を求めず、かくのごとくにして作り得たる陳腐なる歌を挙げ、自ら万葉調なりという、こは『万葉』の形を模して『万葉』の精神を失えるものなり。『万葉』の作者が歌を作るは用語に制限あるにあらず、趣向に定規あるにあらず、あらゆる語を用いて趣向を詠みたるものすなわち『万葉』なり。曙覧が新言語を用い新趣味を詠じしう毫も古格旧例に拘泥せざりしは、なかなか『万葉』の精神を得たるものにして、『古今集』以下の自ら画して小区域きよくそくに局きよくそく促おしたりしと同日に語るべきにあらず。ただ歌全体の調子において曙覧はついに『万葉』に及ばず、実朝に劣りたり。惜おしむべき彼は完全なる歌人たるあたわざりき。

曙覧の歌の調子につきて例を挙げて論ぜんか。前に示したる鉢山の歌のごときは調子ほぼととのいたり、されどこれほどにととのいたるは集中多く見るべからず、ましてこれより勝りたるはほとんどあるなし。

しよらゆうのからこちよう
書中乾胡蝶

からになる蝶には大和魂を招きよすべきすべもあらじかし

結句字余りのところ『万葉』を学びたれど勢^{いきおい}抜けて一首を結ぶに力弱し。『万葉』の「うれむぞこれが生返るべき」などいえるに比すれば句勢に霄^{しやうじよう}壤^{じよう}の差あり。

しそつきをみる
緇素月見

しきみ
密^{たか}つみ鷹^{たか}すゑ道をかへゆけど見るは一つの野路の月影

この歌は『古今』よりも劣りたる調子なり。かくのごとき理屈の歌は「月を見る」というような尋常の句法を用いて結ぶ方よろし。「見るは月影」と有形物をもって結びたるはなかなか^いに賤^{いや}しく厭^{いと}わし。

煙

あないぶせ 銚^{さしなべ}子^こかけてたく藁^{わら}のもゆとはなしに煙のみたつ

「あないぶせ」とかように初^{はじめ}に置くこと感情の順序^{もと}に戻りて悪し。『万葉』にてはかくいわず。全くこの語を廢するか、しからざれば「煙立ついぶせ」などように終りに置くべし。下二句の言い様も俗なり。

赤

賤家しずがいえ 這入はいりせばめて物ううる畑のめぐりのほほづきの色

この歌は酸漿ほおずきを主として詠みし歌なれば一、二、三、四の句皆一氣呵成かせいのものせざるべからず。しかるにこの歌の上半は趣向も混雜しかつ「せばめて」などという曲折せる語もあり、かたがたもつて「ほほづきの色」という結句を弱からしむ。

よそありきしつづ帰ればさびしげになりてひをけのすわりをる哉かな

句法のたるみたる様、西行の歌に似たり。「さびしげになりて」という続きも拙く「すわりをるかな」のたるみたるは論なし。「なりて」の語をやめて代りに「火桶ひおけ」の形容詞など置くべく、結句は「火桶すわりをる」のごとき句法を用うるか、または「〇〇すわりをる」「すわり〇〇をる」のごとく結びて「哉」を除くべし。

かつふれて巖いわの角に怒りたるおとなひすごき山の滝つせ

この歌は滝いきおの勢を詠みたるものにて、言葉にては「怒りたる」が主眼なり。さるを第三句に主眼を置きしゆえ結末弱くなりて振わず。「怒り落つる滝」などと結ぶが善し。

島崎土夫主しまざきつちおぬしの軍人いくさびとの中にあるに

妹が手にかはる甲よろいの袖そでまくら寝られぬ耳みみに聞くや夜嵐よあらし

上三句重く下二句軽く、瓢ひさざかしまを倒ひさざかしまにしたるの感あり。ことに第四句力弱し。

こまぎみ
 狛君の別墅二楽亭

広き水真砂のつらに見る庭のながめを曳て山も連なる

前の歌と同じ調子、同じ非難なり。

〔『日本』明治三十二年四月二十二日〕

酔人の水にうちいるる石つづてかひなきわざに臂を張る哉

これも上三句重く下二句軽し。曙覧の歌は多くこの頭重脚軽の病あり。

さいししょうのきみ
 宰相君よりたけを賜はらせけるに

秋の香をひろげたてつる松のかさいただきまつるもろ手ささげて

これも前の歌と同じく下二句軽くして結び得ず。

つづらおり
 羊腸ありともしらで人のせに負れて秋の山ふみをしつ

これも頭重脚軽なり。この歌にては「背に負はれ」というが主眼なれば、この主眼を結句に置かざれば据わらざるべし。

きぬ
 ふくろふの糊すりおけと呼ぶ声に衣ときはなち妹は夜ふかす

こぼれ糸につくりて魚とると二郎太郎三郎川に日くらす

この歌はいずれも趣向の複雑したる歌なれば結句に千鈞の力なかるべからず。しかる

に二首ともに結句の力、上三句に比して弱きを覚ゆ。ことに第四句に「二郎太郎三郎」などいえるつまりたる語を用いなば、第五句はますます重く強きを要す。

曙覧の歌調を概論すれば第二句重く第四句軽く、結句は力弱くして全首を結ぶに足らざるもの最も多きに居る。『万葉』にこの頭重脚軽の病なきはもちろん、『古今』にもまたなし。徳川氏の末ようやく複雑なる趣向を取るに至りて多くは皆この病を免れず。曙覧また同じ。曙覧はほとんど歌調を解せず。歌調を解せざるがために彼はついに歌人たるを得ずして終れり。

これを要するに曙覧の歌は『万葉』に実朝に及ばざること遠しといえども、貫之つらゆき以下今日に至る幾百の歌人を压倒し尽せり。新言語を用い新趣向を求めたる彼の卓見は歌学史上特筆して後に伝えざるべからず。彼は歌人として実朝以後ただ一人いちにんなり。真淵、景樹、諸平、文雄輩に比すれば彼は鷄群の孤鶴こかくなり。歌人として彼を賞賛するに千言万語を費すとも過賛にはあらざるべし。しかれども彼の和歌をもつてこれを俳句に比せんか。彼はほとんど作家と称せらるるだけの価値をも有せざるべし。彼が新言語を用うるに先だつ百四、五十年前に芭蕉一派の俳人は、彼が用いしよりも遥はるかに多き新言語を用いたり。彼の歌想は他の歌想に比して進歩したるところありとこそいふべけれ、これを俳句の進歩に比すれ

ば未だその門牆をも覗い得ざるところにあり。俳人の極めて幼稚なるものといえども、趣味の多様なことは曙覧の歌のわずかに新奇ならんとせしがごときに非ず。曙覧をして俳人ならしめば、ほとんどその名だに伝うるあたわざりしなるべし。いわんや彼は全く調子を解せざるをや。しかるにかくのごとき曙覧をも古来有数の歌人として賞せざるべからざる歌界の衰退は、あわれにも気の毒の次第と謂わざるべからず。余は曙覧を論ずるに方りて実にその褒貶に迷えり。もしそれ曙覧の人品性行に至りては磊々落落々々世間の名利に拘束せられず、正を守り義を取り俯仰天地に愧じざる、けだし絶無僅有のなり。

この稿を草する半にして、曙覧翁の令嗣今滋氏特に草廬を敲いて翁の伝記及び随筆等を示さる。因つて翁の小伝を掲げて読者の瀏覧に供せんとす。歌と伝と相照し見ば曙覧翁眼前にあらん。

竹の里人付記

〔『日本』明治三十二年四月二十三日〕

青空文庫情報

底本：「子規選集 第七卷 子規の短歌革新」増進会出版社

2002 (平成14) 年4月12日初版第1刷発行

底本の親本：「子規全集 第七卷 歌論 選歌」講談社

1975 (昭和50) 年7月18日第1刷発行

初出：「日本」日本新聞社

1899 (明治32) 年3月22日～24日

1899 (明治32) 年3月26日

1899 (明治32) 年3月28日

1899 (明治32) 年3月30日

1899 (明治32) 年4月9日

1899 (明治32) 年4月22日～23日

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2008年2月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

曙覧の歌

正岡子規

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>